
巻き戻り@十万回

赤釘春流

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

巻き戻り@十萬回

【Nコード】

N7312X

【作者名】

赤釘春流

【あらすじ】

彼女が自殺しようとしているのを、止められなかった。目の前で、彼女が死んだ……。と、後悔をしていると、彼女が死ぬ前に時間が戻った。彼女を救うことは出来るのか？

Case 1

夕闇に薙ぐ風に、彼女の髪はなびく。

落ちかけた夕日の下、空には星が見え出して、とても綺麗。

星明かりと月明かり、沈みかけた夕日の光を全身に浴びながら、そこに居るのは僕と、彼女だけ。

煌々と照らす夕日は鮮やかで、異様に神々しい。

だけれど、それ以上に彼女は綺麗だった。

人間じゃないかのように、綺麗だった。

憂い気な表情も、微かな笑いも、全部、綺麗だった――。

この状況を知らなければ、彼女の今の顔を一枚絵で撮ればきっとそれは人々に固唾を飲ませるだろう。

でも僕は、僕はこの状況を知ってしまったているから。

今、この瞬間に同時にここに滞在して、存在しているから――。

彼女は無理に笑顔を作って言った。

「私、もう死ぬことに恐怖するのを止めた！ 今日限りで、死の恐怖から逃れまーす！」

声が恐怖で震えているのが分かる。

「サラ、駄目だ！ 逃げちゃ、駄目だ！」

「だってね、怖いんだよ！ 私はね、貴方が思っ居る程に強く無いの！ 失望した？ ははっ、……失望……した……よね……」

彼女の声が消え入りそうだ。

「失望なんてするものか！ 君はいつだって、頑張ってきたじゃないか！ 今だって、……頑張っているじゃないか……！」

「……ッ！」

彼女は大粒の涙を零した。

「私だって怖いよ！ 死ぬの、怖いよ！ 私の存在が消えちゃうん

だよ!？ 怖くない訳無いじゃん!」

彼女の魂の叫び声が、聞こえる。

「だからね」

彼女は涙を垂れ流しにしたまま、両手を大きく広げた。

「私ね、鳥になるの」

「駄目だよ! 駄目だ!」

「この大空を、羽ばたくの」

でも、僕の声は——届かない。

サラは、地を蹴った。

その小柄な身体が宙を舞った。

最後にサラは僕に何かを言っていたようで、口を動かしていた。

それが意味しているのは……。

バ・イ・バ・イ。

ドンツと大きな音が鳴った。

C a s e 2

「だからね、私、鳥になるの——」

彼女はそう言った。

えっ？

僕は、思わず周囲を見てしまう。

夕闇の、屋上。

サラが落ちた、場所。

なのに目の前にはサラが居る。

これは、どう言う、ことだ？

サラはまだ、死んで居ない……？

「この、大空を、羽ばたくの……」

サラはそう言って、飛んだ。

ドンツと言う音が聞こえた。

「さ、サラ——ッ!」

Case 3

「私、もう死ぬことに恐怖するのを止めた！ 今日限りで、死の恐怖から逃れまーす！」

声が恐怖で震えているのが分かる。

これ、……さっきも見た、……よな？

心臓病を患って、医者に余命三ヶ月の宣告を受けた、僕の彼女のサラ。

日に日に身体が弱っていく彼女は、最後の力を振り絞って、屋上までやってきた。

病室に彼女が居ないと気づいた僕は、彼女が好きだった屋上へやってきていた。

すると、彼女は柵の向こう側に居たんだ。

柵の大きさは、寄りかかれるくらい。

病人のサラがギリギリ、越せるくらいの大きさだ。

——駄目だ、言葉じゃ通じない……！

僕は、サラに向かって全力で走った。

「っ……！」

サラは走った僕に驚いたようで、柵から手を離してしまった。

その時に、風が吹いた。

サラは、その風の勢いに勝てずに——。落ちて行った。

ドンツと言う音と共に、遠くの方でプチトマトみたいになっているサラの姿が見えた。

「……あっ……」

その瞬間、また時間が戻った。

Case 4

「私だって怖いよ！ 死ぬの、怖いよ！ 私の存在が消えちゃうん

だよ!？ 怖くない訳無いじゃん!」

彼女の魂の叫び声が、聞こえる。

「だからね」

彼女は涙を垂れ流しにしたまま、両手を大きく広げた。

「私ね、鳥になるの」

どうしたら、良いんだ……!

僕は、彼女を救いたい――。

さっきは、走ったから彼女が驚いて落ちてしまった。

なら、今度はゆっくりと近づいていけば……。

でも、僕が歩を進めた瞬間に、彼女は落ちてしまった。

――一体、どうすれば良いって言うんだ……!

Case 150

もう、彼女は『何回』、死んだ?

何回、時間が巻き戻っているんだよ……。

「私、もう死ぬことに恐怖するのを止めた! 今日限りで、死の恐

怖から逃れまーす!」

声が恐怖で震えているのが分かる。

もう、飽きる程に見たし聞いた台詞だ。

僕は、少し壊れてきたのかもしれない。苛立ちを抑えられずにこ

う言ってしまった。

「ふざけんなよ! 死ぬとか、死なないとか……。僕はお前に死ん

で欲しくないんだよ……! 僕を、一人、残して行くなよ……!」

くそっ……。

くそっ……!

不甲斐ない自分が、情け無い。

どんな方法を試しても、サラを助けることが出来ない。

どうすれば良いんだよ……!

「ごめんね……」

サラはそう言って、飛び降りた。

C a s e 1 4 4 2 3

「うあああああああああああ！」

何だ、何だよこれ！？

何で僕はこんな目に合って居るんだよ！

もう、何回目だ！？ 何十回目だ！？ 何百回目だ！？ 何千、

何万回目だ！？

気が狂いそうだ、狂ってしまいそうだ！

サラが、突然の僕の奇行に驚いている。そりゃそうだろう、僕だって、自分自身が何なのかさっぱり分からないくらいだから、サラに分かる訳が無い。

僕は、走って行って、フェンスを乗り越えた。

もう、良い。

死んでやる。

僕の身体が潰れる音が、聞こえた。

C a s e 5 6 8 3 9

結論から言うと、死ねなかった。

確かに死んだはずなのに、時間が巻き戻っていたからだ。

千回を超えた辺りから僕は傍観者で、ずっと変わらない光景が続くのを眺めていた。

もう、恐らくだけれど一年や二年は経っているんじゃないだろうか？

それくらい長い期間、ここに閉じ込められている。

僕を解放してよ……。

誰か……。

聞きなれた、ドンツと言う音が聞こえた。

「……どうしたの？」

サラが、僕にそう聞いてきた。

「……………え？」

僕は、顔を上げてどうにかアクションを返す。

半ば寝ていた。

「顔が、死んで居るから……」

「そりゃ……。好きな人に死ぬって言われたら、悲しいだろ……？」

僕は適当にそうやって嘘を吐いた。

本当の理由は、抜け出せない地獄に居るからなんだけれど。

「……私も貴方のことが、好きよ」

「……そうかい」

僕はそう呟く。

と、ふと、そこで気がついた。

「あれ……？　サラ、お前、その髪留め、僕がプレゼントした奴じやなかったか……？」

「っ！」

サラの表情が、変わる。

確か、そうだ。

ゲームセンターで僕が、クレーンで取ってあげたモノだ。

「……そう、よ」

彼女の顔に、影が出来る。

「……ねえ、あの時にした約束、覚えて居る……？」
約束……？」

僕は、何か、約束したのか……？

もう、ずっと、ずっと、ずっと前のことだから、思い出せない。
彼女は物凄く悲しそうな顔をして、そして、飛び降りた。

Case99999

そうだ……。約束……。思い出した。

「あれ？ サラ、その髪留め僕がプレゼントしたものだよね？」

「っ！」

サラの表情が、変わる。

「……そう、よ」

彼女の顔に、影が出来る。

「……ねえ、あの時にした約束、覚えて居る……？」

「……『ずっと、一緒に居ようね』」

僕らがまだ幸せだった頃。

クレーンで、千五百円も使って、五百円もしないだろう髪留めを落とした。

彼女は笑顔で、「ありがとう」って言ったんだ。

それだけで、お金はもう惜しくなかった。

付き合い始めて、二ヶ月だったかな？

僕は、彼女の手を握って、言ったんだ。

『ずっと一緒に居ようね——』『うん——』

僕は、彼女に近寄った。

彼女はビクッと怯えたけれど、飛び降りはしなかった。

僕は、彼女の身体をぎゅっと抱きしめた。

「いつでも、一緒だよ。………死ぬ時も」

「……っ！」

彼女が大粒の涙を流した。

そして、僕達は二人一緒に手を繋いで、屋上から——。
飛んだ。

僕の身体が潰れるのが、分かった。

Case100000

……時間が戻った。

僕が、彼女の身体を抱きしめて居る。

「いつでも、一緒だよ……」

僕は、そう言った。

考える。

もしかしたらこれって、『死んだら時間が戻る』のでは無いだろうか？

そう言えば、今までだって幾らかタイムラグがあった。

だけれど、決まっていたのはいつも、『僕が彼女が死んだら時間が巻き戻る』と言うことだった。

つまり、二人とも生き残れば時間は戻らないんじゃないだろうか――？

僕と、愛する彼女の、二人が生き残れる方法――。

「一緒に、……死んでくれるの……？」

彼女がそう聞いてきた。

僕は、答えた。

「僕は、生きて居たい」

「――っ！ ……そう……」

「サラと一緒に、生きて居たいんだ！」

僕は叫んだ。

時間もう戻りたくないし、サラが死ぬ姿をこれ以上見たくない。

「でも……。私は……。私はもうすぐ死ぬんだよ……。？ ガンだつて、お医者様が言っていたんだよ……。怖いんだよ……。死ぬかもって、考えることが……。だから……」

「僕が、ずっと傍に居てやる」

「――っ！」

「僕が、サラが死ぬまでずっと傍に居るから……。そして、サラがもし死んだら、僕も死ぬ」

サラが驚いて固まってしまっている。

「サラ」

僕は、サラに言った。

「結婚しよう」

「え……？」

「来月で、僕は十八歳になる。結婚出来る年齢だ、だから――」

僕はサラを抱きしめた。

「好きだ」

サラは泣き崩れた。

そして、僕のプロポーズを受け入れてくれた。

時間はもう、それっきり戻らなかった。

後日、看護師さんに尋ねてみた。

「何で、屋上のフェンスってあんなに低いんですか？」

看護師さんは答えた。

「ああ、開放的な方が入院患者達の気分が良いからね、院長が許可しているんだ。それに、今まで只の一度も自殺者や事故での死亡者が居ないしね」

「只の、一度も……？」

「うん」

もしかして、過去にもあの場所では僕みたいに何度も『ループ』した人が居たのでは無いだろうか？

――誰かを助ける為に。

まあ、勝手な想像だけれど、ね。

「サラ、じゃあ、仕事に行ってくるからな」
僕はそう言った。

「ええ、行ってらっしゃい。アナタ」

「パパ」

サラが笑顔でそう言ってくれる。まだ幼い息子が僕の足に絡みついている。

「こらこら、パパの邪魔になっちゃうでしょ？」

彼女が、息子を叱る。

とても幸せだ。

あれから、五年が経った。

彼女のガンは、奇跡的に治った。

医者も、原因が不明だと言っていたが、そんなことは関係無い。今は、この幸せを享受しようと思う。

僕は、いつもの交差点を歩く

その時、暴走車がこちらに向かって突っ込んできた。

「えっ——？」

もう、目の前だった。

その時、僕の身体は誰かによって押された。

抱えられるように、誰かに助けられる。

車は、すぐ傍のコンクリートにぶつかり、大破した。

「いたた……」

そう呟きながら顔を上げると、そこに居たのは、エプロン姿のサラだった。

「えっ……。何でお前が……」

僕がそう呟くと、サラは涙を流しながら僕に抱きついてきた。

そして、言ったんだ。

「良かった……。『やっと』助けられた……！」

……もしかしたら、こう言う出来事は思いの外あるのかもしれない。

END

(後書き)

二日連続で短編をうpした春流です。

いやね、予備校へ行かなくちゃと思うと執筆が進むねっ！(えっ

…今から行きますけれどねw

では、読んで下さってありがとうございましたM(、)M

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7312x/>

巻き戻り@十万回

2011年10月19日17時04分発行